

聖書日課 『からし種』 2020.12.13-12.20

<p>12月20日 (日)</p> <p>詩編 130編</p>	<p>「わたしは主に望みをおき／わたしの魂は望みをおき／御言葉を待ち望みます」(5節)。詩人は「深い淵の底」、すなわち光の一切届かない海の底から主を呼んでいる。絶望に取り囲まれ希望の一片も見いだせない場所。その「深い淵の底」にも主の慈しみと贖いが確かに備えられている。十字架の主が来てくださり、その叫びを聴き取ってくださっているゆえに。</p>
<p>21日 (月)</p> <p>詩編 131編</p>	<p>「わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように／母の胸にいる幼子のようにします」(2節)。バビロン捕囚から解放された時、イスラエルの民は物質的力や軍事力に依存する過ちを悟り、主なる神の前に幼子の信仰をもって歩む大切さに立ち帰った。「子どものようにならなければ神の国に入ることはできない」と教えられた主イエスの招きを心にとめて。</p>
<p>22日 (火)</p> <p>詩編 132編</p>	<p>「わたしたちは主のいます所に行き／御足を置かれる所に向かって伏し拝もう」(7節)。旧約の人々は「神の箱が置かれている所に神は住まわれる」と考えたが、パウロは「天地を創造された神は、人間が造った建物には住まない」と語り、「あなたがたの体は、神の聖霊が宿る神殿である」と告白した。神の自由自在の働きに仕える、やわらかな信仰をいただいて。</p>
<p>23日 (水)</p> <p>詩編 133編</p>	<p>「見よ、兄弟が共に座っている。なんとという恵み、なんとという喜び」(1節)。この詩編の「兄弟」は血のつながりではない。神の愛を真ん中にいただく時、私たちに与えられる信仰と信頼のつながりである。主イエスは、人種、民族、信条や信仰の垣根を超えた交わりの豊かさを身をもって教えてくださった。その主イエスを共に賛美して歩む幸いを心から感謝して。</p>

聖書日課 『からし種』 2020.12.13-12.20

<p>24日 (木)</p> <p>詩編 134編</p>	<p>「主の僕らよ、こぞって主をたたえよ。夜ごと、主の家にとどまる人々よ／聖所に向かって手を上げ、主をたたえよ」(1-2節)。エルサレム神殿には「夜ごと」神に仕え、神を礼拝するレビ人がいた。「人間は夜、罪を犯す」という言葉があるように、暗闇が覆う夜は私たちの弱さがあらわになる時でもある。その暗闇を照らす光として来て下さった方の誕生を覚えて。</p>
<p>25日 (金)</p> <p>詩編 135編</p>	<p>「主は大いなる方…天において、地において／海とすべての深淵において／主は何事をも御旨のままに行われる」(5-6節)。私たち人間が立てた計画はそのとおりに成らないが、「深淵」と呼ばれる、光が届かない深い海の底においても、神の計画は必ず実現していく。「平安を与え、将来と希望を与える」(エレミヤ 29:11)と約束してくださった神に信頼して。</p>
<p>26日 (土)</p> <p>詩編 136編</p>	<p>「恵み深い主に感謝せよ。慈しみはとこしえに」(1節)、「主の中の主に感謝せよ。慈しみはとこしえに」(3節)。この詩編には「慈しみはとこしえに」という言葉が26回も繰り返し賛美されている。イスラエルの歴史のどの場面を切り取っても「恵み深い主の慈しみ」が刻まれているからだ。今日与えられた一日の出来事の中に、主の慈しみを見出し賛美できるように。</p>
<p>27日 (日)</p> <p>詩編 137編</p>	<p>「どうして歌うことができようか。主のための歌を、異教の地で…わたしの舌は上顎にはり付くがよい／もしも、あなたを思わぬ時があるなら」(4-6節)。捕囚となったイスラエルの人たちが、囚われた状態でもなお、主の勝利を口ずさみつつ、異教の地で、主の救いの業に期待しつつ、礼拝をささげている。その姿に励まされつつ、私たちも礼拝をささげましょう</p>